

附属図書館の今後の在り方について

2013年3月

図書館の在り方についての検討WG

目 次

1	課題	1
2	施設の整備・管理	3
2.1	蔵書管理	3
2.2	利用スペース管理	5
3	サービスによる利用促進	6
3.1	来館・非来館利用共通	6
3.2	来館利用	7
3.3	非来館利用	8
3.4	組織の強化	9

1 課題

- 主体的、能動的に学ぶ学生を支援する場とリソースを提供する上で、図書館の果たすべき役割はますます大きい。
- インターネット等の普及による電子メディアの重要性が増加。図書館として、冊子体メディアに加え、電子メディアを整備すること、来館型の利用に加え、非来館型の利用を活性化することが必要。
- 移転から四半世紀が過ぎ、書庫の収納率が 100%に近付きつつある。狭隘化対策に乗り出すことが必要。

今日の我が国の大学に求められる役割として、自ら学び、考える学生を育てることが挙げられる。2012年6月に出された大学改革実行プランは、求められる人材像の一つとして「生涯学び続け、主体的に考え、行動できる人材」を挙げ、これを実現するための大学改革の課題として、「主体的に学び・考え・行動する人材を育成する大学・大学院教育への転換（学修時間の飛躍的増加、学修環境整備等）」を掲げている。すなわち、学生の学びのあり方として、教室で授業を受けさせるだけでなく、学生が主体的、能動的に学ぶように仕向け、またそのための場所を提供することが大学に求められているのである。このような大学教育の改革の方向性を踏まえると、学生の主体的、能動的な学びを支援する場所、またリソースとして、図書館と図書館が提供する各種資料・情報の役割は今後ますます重要である。

また、PC、インターネットの普及とともに、情報の媒体として電子メディアの重要性が増しており、それに伴って、図書館の役割も多様化してきている。すなわち、従来のように冊子体メディアをコレクションするだけでなく、電子ジャーナルや機関リポジトリ・サービスの提供など、電子メディアを活用したサービスの提供がますます重要なものとなってきている。

大学図書館の来館利用者は、本学でも減少傾向にある。本館と医学分館を合わせた総入館者数は、近年では、2005年度の360千人以降、2011年度の328千人へと1割弱減少した。特に本館の減少が顕著で、本館の総入館者数は2006年度の225千人をピークに、2011年度には163千人まで3割近くも減少した。

このような来館利用者の減少は、本学に限らず、国内外の大学図書館に見られることであり、電子メディアを利用することで図書館に来館する必要がなくなったことなどに起因しており、決して図書館の重要性が低下したことを意味するものではない。実際、図書館自身も電子ジャーナルを整備したり、web上でOPACの提供や文献複写等の受付をしたりするなど、来館せずに図書館のサービスを受けられるようサービスを拡充してきている。こうしたサービスを通じた非来館型の図書館利用は、来館型の利用と並んで今後の図書館利用の柱となるものであり、図書館はその活性化に努めていく必要がある。

以上のように、まず、大学の役割として自ら学び、考える学生を育てることが求められていることから、キャンパスにおいて学生が主体的、能動的な学びを展開する場所としての図書館、そしてその主体的、能動的な学びにおいて学生が自由に利用しうるリソースとして図書館が提供する各種資料・情報、これらの充実を努めていかなければならない。また、図書館が提供するリソースとしては、従来からの冊子体メディアとともに電子メディアによるものが今後は重要性を増し、利用の形態としては、来館型だけでなく、非来館型の利用も重視して、その活性化を図るべきである。

以上に加えて、本学独自の課題として、スペース狭隘化の問題がある。旧宮崎大学の木花キャンパス

への移転により、附属図書館（本館）が移転完了したのは1987年のことであり、それから既に25年が経過した。その間に蔵書は増え続け、2011年度には本館の収納率は99%に達した。大学図書館の役割として教育・研究用の図書、資料を収集することは重要であり、今後も蔵書は増える。

以上のような、大学図書館が果たすべき今日的な役割と本学図書館の現状を踏まえ、本学図書館は、現有の施設、サービスの見直しを行い、将来に向けて機能強化を図っていかなければならない。施設の面では、本学が抱える狭隘化問題への対策に本格的に取り組み、スペースの有効活用を図るとともに、スペース利用のあり方を見直し、図書館として学生にとって魅力的な学びの場の提供に取り組む必要がある。サービスの面では、学生の主体的、能動的な学びを助けるため、アクティブ・ラーニング支援機能を強化することをはじめ、来館利用、非来館利用それぞれについてサービスを充実し、利用促進を図る必要がある。

2 施設の整備・管理

2.1 蔵書管理

- 限界に近付きつつある収納率（本館 99%、医学分館 90%）。早急に狭隘化対策を講じる必要がある。
- 資料の除却について具体的方針を定め、今後 5 年間で 20,000 冊の除却を上乗せして実施。
- 加えて、本館は一階書庫の集密書庫化、医学分館は書架の増設で、今後 10 年は収納率を 100%未満に。
- 長期的には新たな蔵書スペースの確保が必要。

本館においては、配架冊数を収納可能冊数で割った収納率が既に 99%に達している。本館の棚板延長は 14,032m、収納可能冊数は 389,778 冊（棚板 0.9m 当たり 25 冊、学術情報基盤実態調査の算出方法による）であるのに対し、2012 年 4 月の配架冊数は 387,646 冊で、収納率が 99%を超えている。一般に収納率が 70%を越すと、配架に支障を来すとされている。本館では毎年新たに約 5,500 冊を受け入れており、既に収納能力が不足していることは明らかである。

近年は、学部における教員の配置が小講座制でなくなったため、退職教員が保管していた図書・資料を引き継ぐ教員がおらずに図書館に返却されるものが増えていることも、図書館の狭隘化問題を深刻にしている。2012 年度は退職教員から返却された図書・資料の一部を教育文化学部で保管してもらっている状態である。現在、研究室備付図書は約 114,000 冊あり、これが今後返却されてくることに対しても備えが必要である。

また、医学分館では、棚板延長 4,301m、収納可能冊数 119,472 冊に対し、配架冊数が 107,702 冊であり、収納率は 90%となっており、既に収納能力が不足している。医学分館では毎年新たに 2,000 冊を受け入れており、5 年程度で収納可能冊数を超過する見込みである。加えて、2013～15 年度に予定されている医学部研究棟の改修に伴い、講座備付図書が大量に返却されてくることも懸念され、その場合、より早期に収納冊数を超過する可能性がある。

以上のことから、狭隘化対策には早急に取り組む必要があり、2012 年度には、図書・雑誌の除却の方針の見直しと、本館一階書庫への集密書架の設置を行った。

図書館資料の除却については、これまで図書管理細則に定めがあるのみであったが、蔵書スペースの有効活用のため、より具体的な方針に沿って除却を進めることとし、その方針として、「図書館資料の配架に伴う管理方法について」を策定した。これにより、図書は複本を置く場合は原則として一冊までとすることで約 16,000 冊を、電子版がオープンアクセスとなっている雑誌の冊子版を廃棄することで約 3,000 冊を除却するなど、計約 20,000 冊を除却することとし、この作業を 2013～2017 年度までの 5 年間で行う。

本館一階書庫の書架は全て集密書架に置き換えることとし、2012 年度には全体のおよそ半分を集密書架に置き換えた。今後さらに残りを集密書架に置き換える必要がある。

医学分館については、本館一階書庫でこれまで使用していた書架を再利用し、医学分館二階に増設・入れ替えることで、約 8,000 冊の収納能力増強が可能である。

資料 1 は、以上の方針を踏まえ、2022 年度までの 10 年間の蔵書数のシミュレーションを行ったものである。本館においては今後 5 年間で 20,000 冊の除却を特別に行うことを計算に入れた。その上で、本館については収納可能冊数について、①現状（集密書架なし）、②集密書架 50%、③集密書架 100%、

の三つのケースを比べ、医学分館については収納可能冊数について、①現状、②二階書架増設（8000冊増）、の二つのケースを比べた。

本館では、一階書庫に集密書架を 50%配置することで、収納能力超過を 2020 年まで先延ばしできるが、10 年を超えて収納能力超過を回避するには集密書架の 100%配置が必要である。医学分館では、二階書庫の増設によって収納能力超過を 2021 年まで先延ばしできるが、10 年を超えて十分な収納能力超過を回避するには、さらなる対策が必要であり、今後具体策を得る必要がある。

本館についても 2024 年度には収納率が 96%となり、その後再び狭隘化の問題が生じることは確実である。荷重の関係でこれ以上、二階、三階に集密書架を増設することは不可能であるため、長期的には本館・医学分館を併せて新たな蔵書スペースの確保も検討していくべきである。

2.2 利用スペース管理

- 学生の主体的、能動的な学びの場として、2012 年度より本館、医学分館それぞれにラーニング・コモンズを設置。
- 今後、利用状況を見ながら、飲食の可／不可を含めた利用ルールの改善、設備・サービスの充実を図る。
- 他大学の動向も踏まえ、ラーニング・コモンズのためのより本格的なスペースの整備も要検討。

冊子体メディアの重要性の相対的低下とともに、図書館の来館利用者は減っている。しかし、大学図書館はなにも図書の閲覧に特化した場所ではなく、学生の自学自習の場所としての役割も持っている。とりわけ、学生の主体的、能動的な学びを支援していくことが求められている今日、そのための空間として図書館を位置付け、利用の活性化を図ることが重要である。

ラーニング・コモンズは、このような学生の学びを支援するための空間として、近年国内外の大学図書館で導入が進んでいるものである。従来からある静粛を求められる閲覧スペースとは別に、会話可能なオープン・スペースで、共同学習、プレゼンテーションや学習相談に適宜利用できるよう可動式の机、椅子等を配置した空間である。

本学では、2012 年 4 月に医学分館で一階閲覧室、二階多目的室をラーニング・コモンズに切り替え、運用を始めた。本館では、同年 10 月に自由学習室、セミナー室、グループ学習室 1・2 を設置し、運用を開始したところである。

このように本学ではラーニング・コモンズを設置し、その運用を始めたところであるので、当面は学生の利用状況を見守りながら、3.1 で取り上げるサービスの充実を図るとともに、机・椅子等の設備の充実に努めることとする。

しかし、今回ラーニング・コモンズ用に確保したスペースは十分とは言えない。最も大きなスペースは本館の自由学習室であるが、ここでも 50 人も入れれば混み合う状況である。これは、今回のラーニング・コモンズの場所の確保を既存のスペース利用をあまり大きく変えずに行ったためである。先行する他大学の事例でも、ラーニング・コモンズ向けにより本格的な施設整備を行うところもある。将来的には、本学もより広い面積をラーニング・コモンズとして確保し、多様なニーズに応えられる施設整備を行うことを検討していくべきである。

なお、閲覧室、ラーニング・コモンズに共通する課題として、学生の利用においてどこまで飲食の自由を認めるかという問題がある。これについては、この数年の検討を経て現在のところ、本館ではラーニング・コモンズに限り蓋付きの飲物だけを可としている。しかし、ペットボトルや水筒の携帯が珍しくない現在、このルールでは律しきれなくなっている部分もある。本館の閲覧室、ラーニング・コモンズは現在全面がカーペット床であるが、飲物をこぼしても対応しやすい床に変えるなどの方策も含めて、検討を続けていく必要がある。

3 サービスによる利用促進

3.1 来館・非来館利用共通

- 図書館の基本サービスはレファレンスであるが、利用者がレファレンス・デスクに来るのを待っているだけでは、図書館のサービスとして不十分。
- まずは、図書館利用の価値を知ってもらうべく、来館・非来館利用とも、利用方法についてのガイダンスを積極的に提供すべき。
- 特に、電子ジャーナル等の非来館利用についてガイダンスの充実を図ることが必要。
- 教員との連携により、パスファインダーを着実に整備し、授業を起点とした発展的、応用的な学習を支援。
- 社会貢献と地域社会へのサービスの充実。

図書館においては、施設、蔵書の充実を図ることも重要であるが、もう一方で、各種のサービスを提供し利用の促進を図ることもそれに劣らず重要である。図書館における来館者へのサービスの基本はレファレンスであるが、利用者がデスクにレファレンス・サービスを利用しにくるのを待っているだけでは、十分とは言えない。

図書の見つけ方など、図書館の利用と文献検索に関するガイダンスを提供することは、今や図書館が当然担うべき役割となりつつある。本学でも、図書館主催の情報検索ガイダンスを行っているほか、本館では近年、大学入門セミナーの一部として三学部の多くの学科の1年生を対象に図書館がガイダンスを提供している。医学分館では、2012年度後期から図書館主催のレギュラーセッション、テーマ別セッションの企画を始めたところである。

電子ジャーナルなどの普及により、ガイダンスで扱うべき題材は多様化している。学生や教員に聞いても、図書館が提供している電子ジャーナルやデータベース等の存在を知らなかったり、あるいは使い方が分かっていなかったりすることはかなり多い。各種電子ジャーナル、データベースを取り上げたガイダンスや、文献管理・論文作成支援ソフトを取り上げたガイダンスなど、幅広く展開していくべきである。また、非来館利用に関しては、こうしたガイダンスの機会を通じて、利用者ニーズのフィードバックを受けることも課題である。

また、2012年度からはパスファインダー作成の制度を導入した。パスファインダーは特定のテーマについて調べる際に参考となる図書資料等のリストである。本学では授業と関連したパスファインダーを教員と図書館員の連携で作成することとしており、授業を起点として学生が自ら行う発展的、応用的な学習を支援するためのものである。図書館員から教員に順次働きかけて、着実に整備を進めるべきである。

さらに、本学が有する学術情報や資料を学外の研究者及び地域社会へ情報提供するとともに、機関リポジトリなどの本学構成員が執筆した学術成果を一層充実させ、その研究成果を広く社会へ発信することで、グローバルな利用へと進めて行くことも重要である。

3.2 来館利用

- 学生の主体的、能動的な学びを支援するためのサービスの展開が課題。
- 授業におけるアクティブ・ラーニングの場、リソースとして図書館を活用してもらうよう、授業担当教員との連携を図る必要。
- 蔵書の充実について、教員からの学習用図書のおすすめ方法には見直しの余地。
- ラーニング・コモンズでの授業や TA による学習相談の実施を働きかけるなど、ラーニング・コモンズを活かした取り組みも課題。

来館利用に関しては、学生の主体的、能動的な学びを支援するためのサービスの展開が課題である。一つの方向性は、授業と連携して、学生がアクティブ・ラーニングに取り組めるよう、リソースと場を提供していくことである。また、それとも関連するが、もう一つの方向性は、整備したラーニング・コモンズを活用したサービスを展開していくことである。

アクティブ・ラーニングは授業の中に学生の能動的な学びを組み込んでいくことを指している。具体的な方法としては、調べ学習や体験学習、共同学習、それらに基づくレポート作成やディスカッションなどを授業の一環として行うことである。図書館としては、このようなアクティブ・ラーニングのための場所とリソースを提供していくことが重要であるが、単に自由に利用してもらうというだけでなく、授業担当教員との連携を築き、サービスの充実に努めることも重要である。

本学では、アクティブ・ラーニングを支援する制度として、2009 年度からリザーブブックの制度を運用している。これは、教員が指定した本を指定された期間、リザーブブック・コーナーに配架するとともに、利用を館内に限定し、受講学生のレポート作成などに高度に活用してもらうというものである。今後は、リーディング・アサインメントを課して学生に学修時間を活用させる方向性が強まることが考えられ、教員と連携して、こうした授業で課される課題に即した蔵書の充実に力を入れるべきである。

なお、授業に関わっては、授業シラバスに掲載された図書の購入を、医学分館では統合前から実施しており、本館では 2012 年度から開始したところである。これは学習用図書購入の一環として行うものであるが、学習用図書の選書は、分野によって教員から十分な推薦が行われないなど、改善すべき点が残っている。このような面からも教員との連携をどう図っていくか見直していくべきである。

一方、ラーニング・コモンズを活用するという観点からも、教員との連携により、授業と連動した活用策に取り組んでいくべきである。授業で課された共同学習の場として利用してもらうことや、授業でディスカッションを行う場合には授業自体をラーニング・コモンズで行ってもらうこと、ラーニング・コモンズに学習相談コーナーを設け、時間を決めて TA が学生からの学習相談を受けること、などが授業と連動した利用として考えられる。これらの利用について、図書館側から教員への具体的な働きかけ、提案を今後行っていくべきである。

なお、来館利用の活性化を図る上では、来館利用者の把握方法の改善についても合わせて検討していくべきである。現在のところ出口を通過する人数をカウントしているに過ぎず、誰が来て、どれだけの時間、何をしているのかについては把握できていない。学生証の IC カード化が進むならば、それを活用した利用者把握を検討すべきである。

3.3 非来館利用

- コンテンツの充実、利便性の向上、ガイドンスの充実が課題。
- そのためにも、非来館利用の実態を把握する仕組み、利用者からのフィードバックを得る仕組みの整備が必要。

非来館利用に関しては、提供する電子ジャーナルやデータベースの拡充などコンテンツの充実に努めているところであり、今後はそれに合わせて、3.1 で述べたガイドンスの充実などに取り組んでいかなければならない。また、自宅からもアクセスできるコンテンツ、サービスを増やすなど、利便性の向上も課題である。

こうしたコンテンツやガイドンスの充実、利便性の向上に当たって、現在問題であるのは、非来館利用の利用実態が十分に把握されていないことである。コンテンツへのアクセス数の把握、解析が十分行われていない。また、非来館型の利用であるだけに、利用者の顔が見えず、利用者からの声が届きにくいという問題がある。従って、アクセス数の把握、解析を一定程度ルーティン化するほか、利用者からのフィードバックを得る仕組みを検討すべきである。

3.4 組織の強化

- サービスの多様化、高度化を支える図書館員の育成とスキルアップが必要。
- 教員と図書館員と信頼関係を構築し、緊密な連携のもとサービスを向上していくことが望ましい。
- 学生の TA としての活用や、学生サポーター組織の整備も課題。

図書館に求められるサービスの多様化と高度化を考えると、その要請に応えられるよう、図書館員の育成とスキルアップを図る必要がある。専門知識と経験を持った職員の確保及び育成のため、他大学との人事交流や国立大学法人等職員採用試験（図書区分）による採用を行う必要がある。図書館員は、図書館情報学の専門知識と経験を持つことはもとより、例えば、各学部担当の図書館員を決め、パスファインダーを協力して作成するなど教員とコミュニケーションを図りより緊密な関係を醸成できるような方策を講じるなど、教員との信頼関係を構築する必要がある。また、スタッフ・デベロップメント（SD）活動を通じてスキルアップに努めるとともに、教育研究活動に対する理解や特定の専門分野についての知識を習得することも必要である。

さらに、学生の活用も課題である。現在は時間外の窓口業務に学生のアルバイトを雇用しているが、それにとどまらず、図書館の利用ガイダンスや学習相談に学生を TA として採用することや、学生サポーター組織を立ち上げることで、図書館で行うサービスの充実や企画・立案にも学生の意見を反映させ、あるいは学生自らそれらに携わってもらうことも、検討していくべきである。

図書館の在り方についての検討WGの流れ

平成20年7月22日(火)	平成20年度第2回 宮崎大学附属図書館運営委員会にて「図書館の在り方についての検討WG」設置
平成20年9月18日(木)	第1回 図書館の在り方についての検討WG開催
平成21年8月28日(金)	第2回 図書館の在り方についての検討WG開催
平成22年9月6日(月)	平成22年度第1回 図書館の在り方についての検討WG開催
平成23年6月29日(水)	平成23年度第1回 図書館の在り方についての検討WG開催
平成23年8月3日(水)	平成23年度第2回 図書館の在り方についての検討WG開催
平成24年1月23日(月)	平成23年度第3回 図書館の在り方についての検討WG開催
平成24年7月13日(金)	平成24年度第1回 図書館の在り方についての検討WG開催
平成24年11月19日(月)	平成24年度第2回 図書館の在り方についての検討WG開催

図書館の在り方についての検討WG委員

委員長	藤掛 一郎 (副館長、農学部教授)
委員	檜原 義顕 (教育文化学部准教授)
〃	高宮 考悟 (医学部教授)
〃	原田 隆典 (工学部教授)
〃	吉田 照豊 (農学部教授)
〃	藤埴 智一 (教育・学生支援センター准教授)

本館・分館の収納可能性シミュレーション

本館

25.1.18現在

年度	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	備考
受入冊数	4,648	5,500	5,500	5,500	5,500	5,500	5,500	5,500	5,500	5,500	5,500	5,500	※H24以降は、毎年5,500冊を受入増で算出
内訳	研究室受入		3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	3,000	
	本館受入		2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	2,500	
返却冊数	15,017	6,298	3,863	1,572	7,495	3,086	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	6,000	※H23-27名退職、H24～H28-64名退職 ※H29以降は、H23～H28の平均冊数で算出
廃棄冊数		-2,500	-6,500	-6,500	-6,500	-6,500	-6,500	-2,500	-2,500	-2,500	-2,500	-2,500	※H25以降、5年間-6,500冊、それ以後は2,500冊を重複図書等とし廃棄で算出
蔵書冊数	501,574	504,574	503,574	502,574	501,574	500,574	499,574	502,574	505,574	508,574	511,574	514,574	
本館配架冊数	387,646	408,961	408,824	406,396	409,891	408,977	410,977	416,977	422,977	428,977	434,977	440,977	
研究室備付冊数	113,928	95,613	94,750	96,178	91,683	91,597	88,597	85,597	82,597	79,597	76,597	73,597	

収納可能冊数	①現状(集密書架なし)	389,778	389,778	389,778	389,778	389,778	389,778	389,778	389,778	389,778	389,778	389,778	389,778
	②集密書架50%	389,778	430,000	430,000	430,000	430,000	430,000	430,000	430,000	430,000	430,000	430,000	430,000
	③集密書架100%	389,778	430,000	460,000	460,000	460,000	460,000	460,000	460,000	460,000	460,000	460,000	460,000
収納可能残数	①現状(集密書架なし)	2,132	-19,183	-19,046	-16,618	-20,113	-19,199	-21,199	-27,199	-33,199	-39,199	-45,199	-51,199
	②集密書架50%	2,132	21,039	21,176	23,604	20,109	21,023	19,023	13,023	7,023	1,023	-4,977	-10,977
	③集密書架100%	2,132	21,039	51,176	53,604	50,109	51,023	49,023	43,023	37,023	31,023	25,023	19,023
収納率	①現状(集密書架なし)	99.5	104.9	104.9	104.3	105.2	104.9	105.4	107.0	108.5	110.1	111.6	113.1
	②集密書架50%	99.5	95.1	95.1	94.5	95.3	95.1	95.6	97.0	98.4	99.8	101.2	102.6
	③集密書架100%	99.5	95.1	88.9	88.3	89.1	88.9	89.3	90.6	92.0	93.3	94.6	95.9

分館

年度	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	備考
受入冊数	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	2,000	※H24以降は、毎年2,000冊を受入増で算出
内訳	研究室受入		500	500	500	500	500	500	500	500	500	500	
	分館受入		1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	1,500	
返却冊数		2,500	1,000	500	500	500	500	500	500	500	500	500	
廃棄冊数		-800	-800	-400	-400	-400	-400	-400	-400	-400	-400	-400	※H26以降は、400冊を重複図書等とし廃棄で算出
蔵書冊数	122,358	123,558	124,758	126,358	127,958	129,558	131,158	132,758	134,358	135,958	137,558	139,158	
分館配架冊数	108,220	111,420	113,120	114,720	116,320	117,920	119,520	121,120	122,720	124,320	125,920	127,520	
研究室備付冊数	14,138	12,138	11,638	11,638	11,638	11,638	11,638	11,638	11,638	11,638	11,638	11,638	

収納可能冊数	①現状	119,472	119,472	119,472	119,472	119,472	119,472	119,472	119,472	119,472	119,473	119,474	119,475
	②二階書架増設	119,472	127,472	127,472	127,472	127,472	127,472	127,472	127,472	127,472	127,473	127,474	127,475
収納可能残数	①現状	11,252	8,052	6,352	4,752	3,152	1,552	-48	-1,648	-3,248	-4,847	-6,446	-8,045
	②二階書架増設	11,252	16,052	14,352	12,752	11,152	9,552	7,952	6,352	4,752	3,153	1,554	-45
収納率	①現状	90.6	93.3	94.7	96.0	97.4	98.7	100.0	101.4	102.7	104.1	105.4	106.7
	②二階書架増設	90.6	87.4	88.7	90.0	91.3	92.5	93.8	95.0	96.3	97.5	98.8	100.0